



MCEED4

~裏切られた艦長~

ミネルバは今日ラクス・クラインが乗艦する。

一部クルーは既に合流しているカガリ・ユラ・アスハと共に出迎えることになつていて、出迎えメンバーの一人であるルナマリア・ホークはカガリを探して艦内を回っていた。



一通り探しても見つからず、しかたなく最初に見たカガリの部屋に戻ってくと、部屋でレイゴ・クアークに出会う。

「御主人様、カガリさん見ませんでしたか」

「カガリ？見たよ」

「本当ですか！どこにいました？」

「教えてやるからこっちはいい」



「はいっ」

ルナマリアが傍に駆け寄ると……

「あっー?」

「ぢゅるるっ♡じゅるるっ♡」

机に隠れてレイゴのチンプをしゃぶるカガリがいた。

まさかこれからラクス・クラインを出迎えようという
こんな時にこんなことをしているとは予想していない
ので、素で驚いてしまう。

「カガリさん!こんなところにいるんですね」

「悪いな、入れ違いだったみたいだ」

「御主人様は悪くありません♡」

「ですがもうすぐ出迎えの時間です」

「いかがされますか?」

「ああ、こっちはもう終わりでいいよ」

「暇つぶしにしゃぶらせてただけだから」

「探させて悪かったな」

机の下にいたカガリが姿を見せると、ルナマリアは冗談半分で少し怒った。

「もう！必死で探したんですよ！？」

「隠れて御主人様のオチンポに御奉仕しているなんてずるいですよっ」

「ルール違反です！」

「御命令だったからな」

余計にルナマリアが怒ってしまいましたそうだったので、レイゴが割って入る。

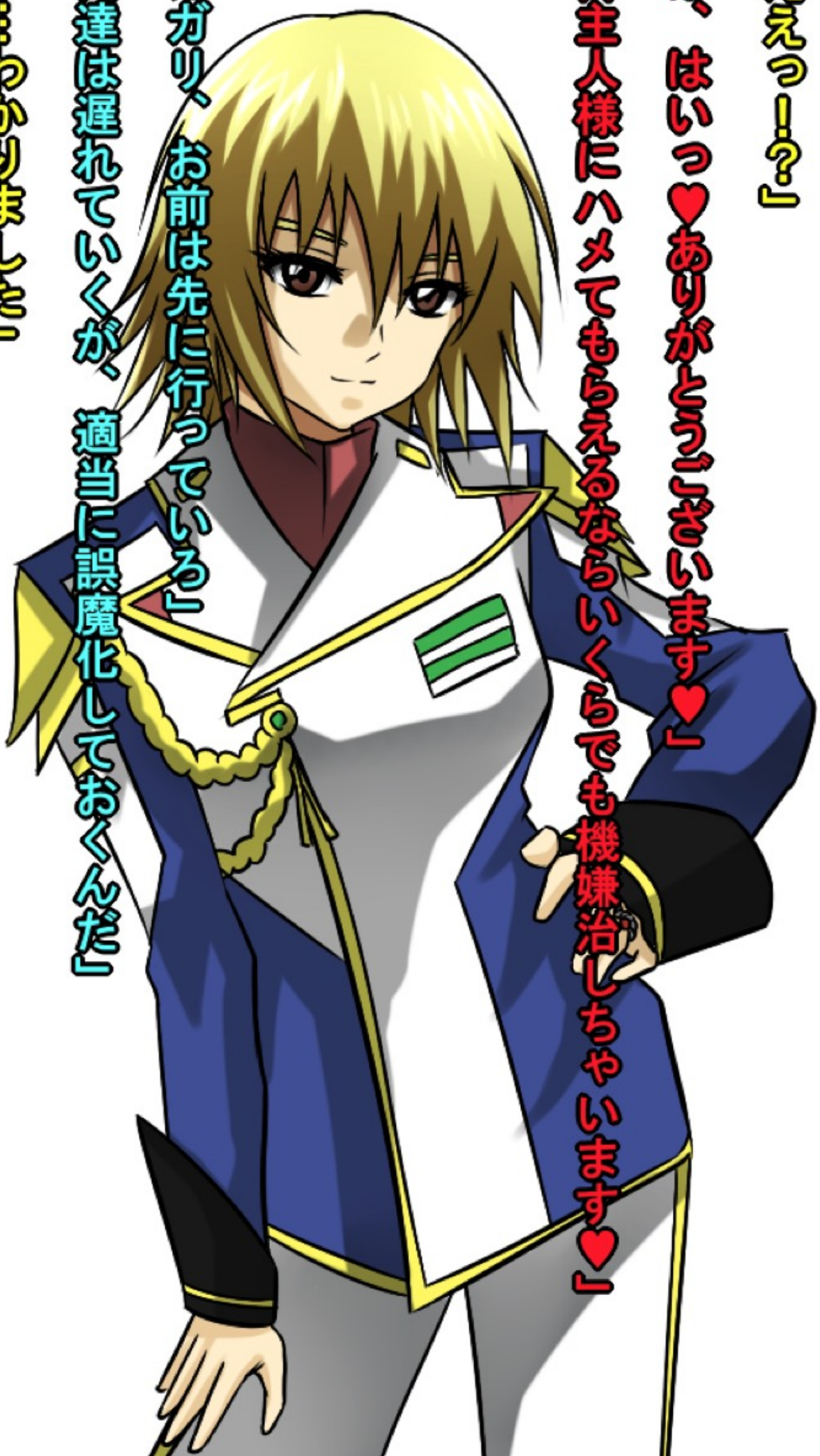


「そう怒るなよ。尻をだせ。ハメてやるから機嫌治せよ」

「ええっ!?!」

「は、はいっ♥ありがとうございます♥」

「御主人様にハメてもらえるならいくらでも機嫌治しちやいます♥」



「カガリ、お前は先に行っている」

「俺達は遅れていくが、適当に誤魔化しておくんだ」

「……わかりました」

「私はオマンコしてもらっていないのに……ずるいのはどっちだよ」

カガリは少し納得がいかなさそうだったが、素直に連絡橋へと向かった。

「お待ちしていました。ようこそミネルバへ」

「乗員一同、貴女を歓迎します」



「ありがとうございますわ」

「フランスの出張がはじまっていますわ」

ルナマリアはレイゴと二人でやってきました。

「どういった場に遅れるなんてらしくないわね」

「も、申し訳ありませんっ」



内股気味でモジモジしているルナマリアに小言を言っタリアだったが、隣にいたレイゴが助け船を出した。

「……っあ♥」

「タリア艦長、申し訳ありません。
私が彼女に野暮用を頼んで引き止めてしまっています」

「そうでしたか。いずれにせよ、時間には気を付けてね」

「は、はいっ。申し訳ありませんでした」



連絡艇との通信を終えたタリアは、自分を先頭に連絡橋で整列する。

自分を除く全員が異常だと気付かぬまま、先頭での出迎えた。

直ぐ後ろにいるルナマリアが精液をアソコからこぼしていること、自分の脇に立つカガリがついさつきまで男のチンポをしゃぶっていたこともタリアは知る由もない。

正常な彼女に、そんなことがあるという発想すらないからだ。

小型艇が到着し、扉からラクス・クラインが降りてくると、それを皆が一斉にそのラクスもまた、心を変えられた一人なのだが……。

「ミネルバへようこそ」

「これほど大勢でのお出迎え、ありがとうございますわ」

形式的な出迎えのやりとりが終わると、タリアはラクスを応接室に案内することにした。そこで滞在の日程などを話すつもりなのだ。

応接室にはタリアとラクスの他にルナマリアとカガリ、そしてレイゴが付いていくことになった。シンを始めとする他の面々はそれぞれ通常業務に戻る。

応接室に入ると一息つく間もなくラクスはレイゴへ駆け寄り、ニツヨリ微笑んだかと思うと体の向きを変えて下着を脱ぎ始めた。



「な、何をしているんですー!?!」

「御主人様に久しぶりにお会いしたんですもの、即ハメしていただくのは当
「そ、即ハメー!?!」、御主人様!?!」

「あらっ?まああ……ふんふん♥そっくらっ!」とでしたか」

タリアの反応に事情を察したラクスは、一旦パンツをあげてレイゴへ頭を下



「ジュンジュンですわ」

「残念だったな、諦めろ」

「チェックメイトですね」

「ちよつとーっな、何をするの！離しなさい！」

「ジュンはお前の味方は誰もいないってわけだ」



強引に押え付けられてしまつタリアは服を切裂かれ机に固定されてしまつ。女三人と言えどもそのうち二人はコーデイナー。激しく抵抗されても同じ女であるタリアを押え付けるのは容易だった。



「あなたたちこんなことをして……
一体私をどうするつもり!?」

「まだわからないんですか?
なんで私達がこんな風になっているか」

「御主人様に洗脳していただいたからですよ♥」

「なんですって!?!」

激しく怒りをあらわにし、抵抗を試みるタリア。

しかし拘束され身動きが出来ない彼女を見て、
他の牝奴隷達はクスクス笑っている。



「大丈夫。
変えられた私達が言うんですから、
間違いありませんわ♡」

「そうですよ♡
タリア艦長も牝奴隷になる喜びを知れば、
怒りなんてなくなりますから安心して下さい♡」

「そうだな！
牝奴隷になることの素晴らしさを知ったら、
むしろ元に戻りたくなくなるぞ♡」

「というわけで御主人様、あれを……」

「ああ。持ってきてるぞ」

「そ、それは!?!」

レイゴが取り出したのはバイザーの様な物と、
ヘッドフォンだった。

これが洗脳装置なのか――。
タリアはソツとする寒気を覚える。

(ま、まずい！)

これを付けられたら終わる。

そう直感が働き、さらに激しく体をゆすって拘束を
解こうとするが、力の入らない態勢で頑張った
ところで時既に遅しだった。

「私が着けて差し上げますわ♡」

「やめなさい！本当にだ、だめっ――ダメよっ！？」

そんな叫びもむなしく、
タリアはラクスによって装置を付けられてしまう。





「スイッチを入れますわね」

この間もずっと叫んでいるタリアアの声を完全に無視して、装置のスイッチが入られる。

カチャッと音がすると、まずヘッドフォンから特殊な音が流れる。

その音は思考をふやかし、必死に目をつぶるタリアアの力を抜いて瞼を開かせてしまう。

そしてひとたび目が開けば、バイザーに映し出された映像によって、彼女は深層心理を書き換えられて洗脳されてしまうのだ。



「あ……あ……」

「洗脳が始まったみたいだな」

「みたいですね♥これで艦長も私達と同じに……♥」

「安心して夢の中に旅立ってください♥」

「目が覚めた時には私達と同じだな!」

「ここへきて、ようやくレイコは口を開いた。

無防備なタリアの体を触りながら、
ルナマリアに命令する。

「バイブとローターは持ってきてるな？」

「こいつにつけてやれ」

「体に快感を覚えさせるんですね」



「そつだ。ついでに例のおしゃぶりも啜えさせる」

「淫乱を促す体質改善媚薬と、御主人様の精液が入った例のアシですね」

「かしこまりました♥」

「カガリさんとラクスさんも手伝ってもらえますか」

「もちろんだ」

「お手伝いさせていただきますわ♥」

ルナマリアは他の牝奴隷と協力し、タリアアの体に器具を取り付けた。

「.....」



「これでよしだな」

「卑猥ですわね♡」

「御主人様、装着完了です♡
お二人ともありがとうございます」

「よし。じゃあスイッチを入れる」

さっそくパイプとローターを動かして、
体に快感を与える。

本来開発されていない体ではそれほど感じることは
無いだろうし、快感を我慢することもできる。

だが催眠状態で受ける快感は意識による抵抗が
全くないため、体は快感の全てを受け入れそれを
記憶してしまう。



さらに媚薬がおしゃぶりから口へ投与されて、
体を淫乱に作り変える。
味覚から伝わる精液の味は、
至高の食べ物と記憶される。
催眠装置によって

タリアは心も体も作り変えられることに抵抗できず、
どんどん牝奴隷に近付いていく。

恍惚とした夢のような洗脳の間が終わる頃には、
真面目な艦長のタリア・クラテイスは消滅し、
淫乱で主に忠実な牝奴隷タリアになっているのだ。

しばらくするとアラームが鳴り、
彼女への洗脳が終了したことを知らせる。

「終わったか。ルナマリア、バイザーを外せ」

「かしこまりました♥」



「目が覚めましたか？」

「……は……？」

「わたし……？」

洗脳明けで記憶や意識の混乱が多少残るタリアに、ルナマリアが状況を説明する。

「艦長は御主人様の牝奴隷になる為に、
たった今催眠装置で人格を変えられたんですよ」



「ああ……そう……だったわね」

「御主人様の牝奴隷に……」

「していただいたんだわ……」

「私は牝奴隷に生まれ変わった……」

「上手く洗脳できたようですわね♡」

「うん。これなら大丈夫だろう。」

「御主人様、拘束を解いてもいいですか？」

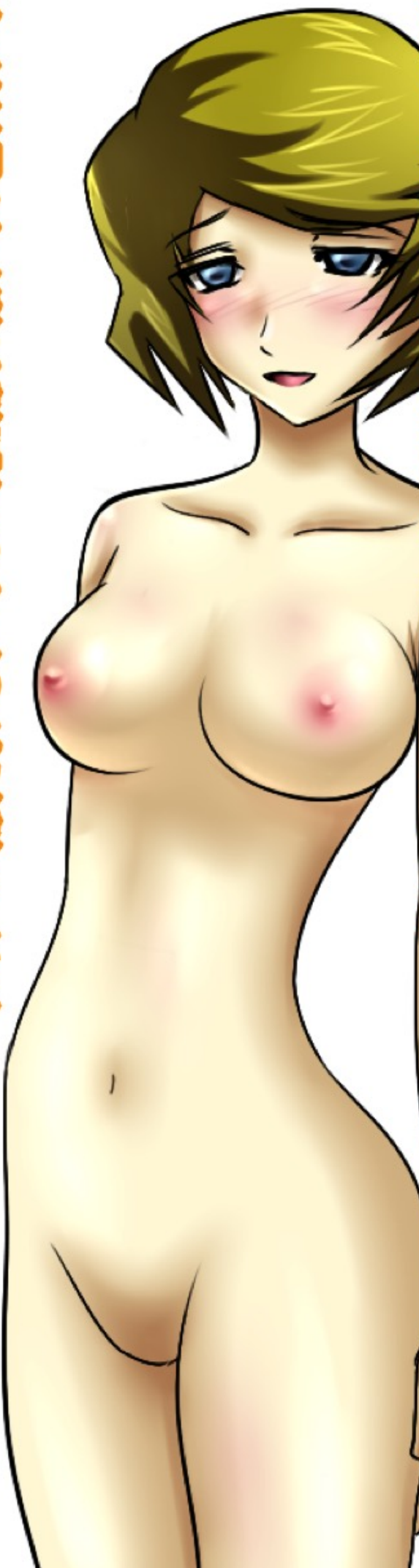
「いいぞ。解いてやれ」

「タリアが牝奴隷に変わったことを確認すると、拘束を解き自由を与える。」

拘束を解かれた立ち上がったタリアは、即座にレイゴの元へかけよる。

「この度は私、タリア・グラデイスを御主人様の牝奴隷にさせていただきありがとうございます」

「軍に属すると言ってくだらない人生から、洗脳という素晴らしい手段で解放していただき感謝してもしきれません」

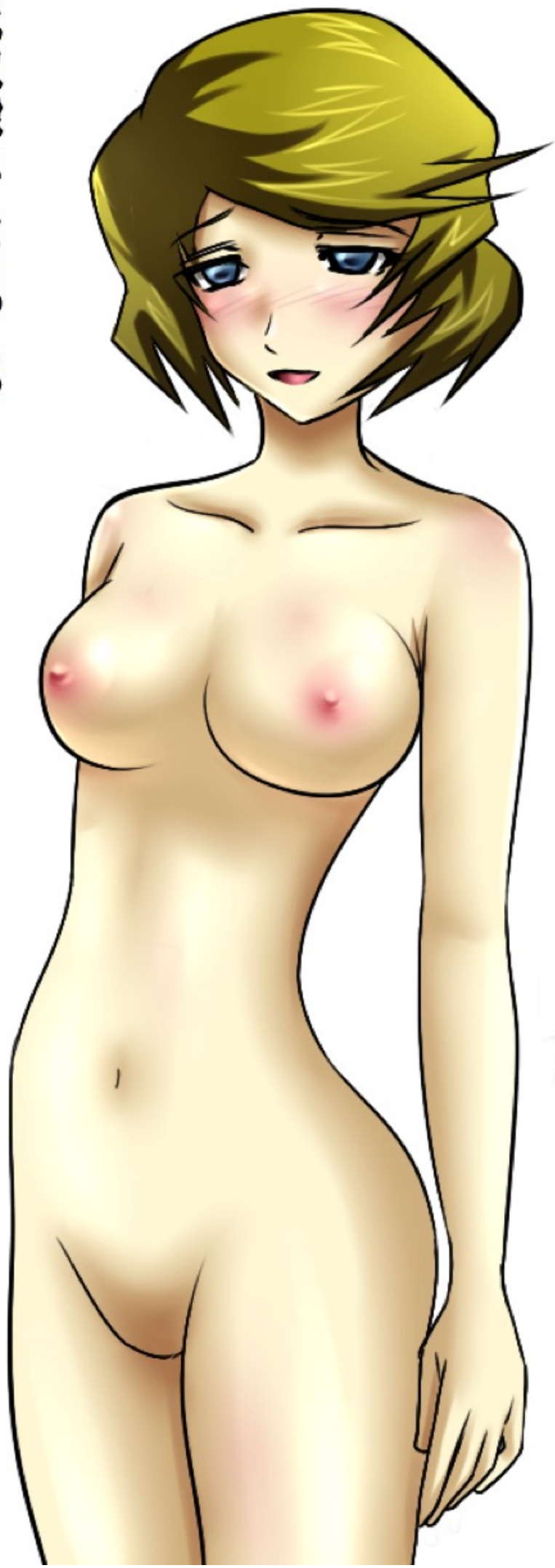


「今後は御主人様に隷属する一人の牝奴隷として、愛と忠誠を持って尽くしていくことを誓います」

「御主人様に捨てられぬよう身を粉にして頑張りますので、どうか宜しくお願い致します……♡」

愛する者を見る蕩けた目で忠誠を誓うこの姿は、
タリアア・グラデイスの人格が完全に作り変えられたことの証だった。

「お前の気持ち良くわかった」



「牝奴隷にしてやる。
だからこいつらと同じように持っている全てを捧げる。
俺の命令に逆らうな。いいな？」

「はい！全ては御主人様の仰せのままに……♡」

「ふふ、これでグラデイス艦長も私達の仲間になったわけですね♡」

「おめでとう！改めてよろしく頼む」

「年は上でも、御主人様の牝奴隷になったのは私の方が先輩ですから、困ったことがあれば言ってくてくださいね！」



「三人とも、これから宜しくお願いします」

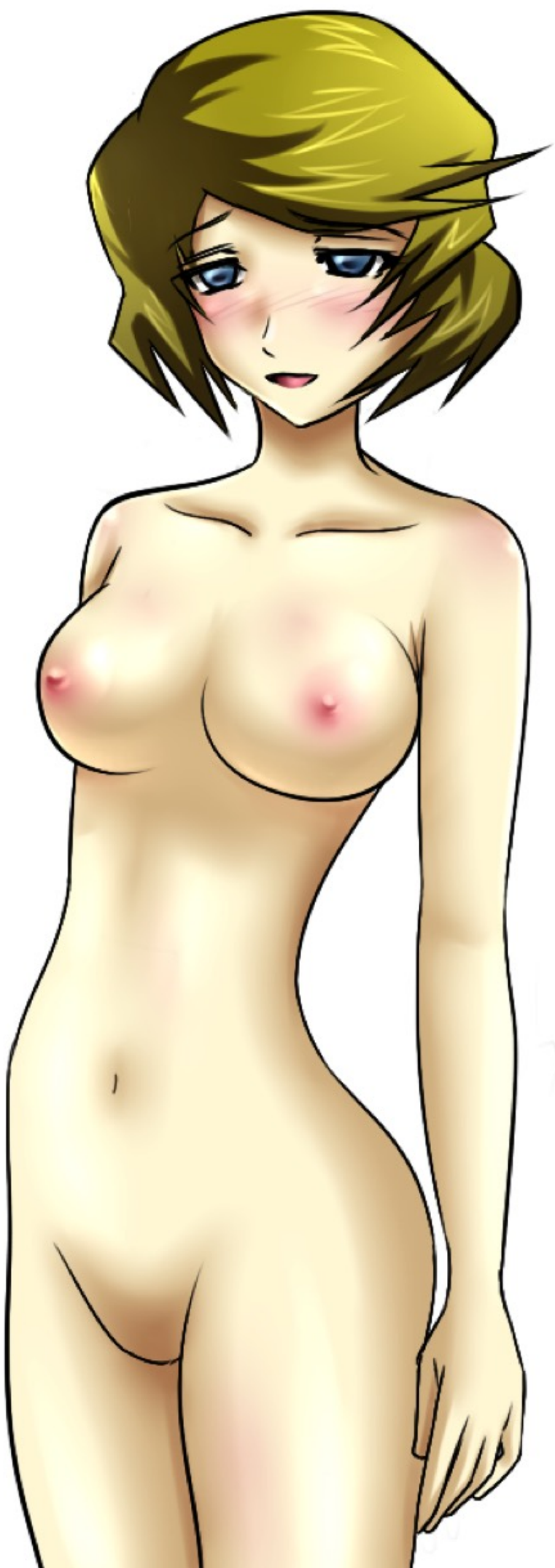
「ルナマリアのお言葉に甘えて、

さっそく頼りにさせてもらってもいいかしら?」

「ええ、もちろんです」

「御主人様、これから私には是非御奉仕させていただきますが、その内容を先輩であるルナマリアに決めて頂いてよろしいでしょうか？」

「面白そうだな、いいぞ」



「ルナマリア。こいつの初奉仕のやりかたをお前が決めてやれ」

「かしこまりました♥
そうですね、それなら……」

ルナマリアが考えたタリアの初奉仕は、意外にも普通のセックスだった。特殊なことがあるとすれば、それを他の牝奴隷が見ている中でするということだろう。

タリアの艦長室に主だった牝奴隷が集まり、見られながらのセックス。同時に、カメラでその様子を艦内のモニターに中継する。



男の奴隷も含め、ミネルバにいる全ての人間がタリアのセックスを目撃する。

見た者は必ず感情移入してオナニーせよという命令も足され、牝奴隷タリアとしての初奉仕は始まった。



「す、すごいな「これは」

「ああっ♥御主人様のオチシポツ♥
奥までっ♥届いてますう♥」

「カリがこすれてっ♥
最高ですっ♥」

元々経験豊富な体は、他の若い牝奴隷達とは違った快感があった。

チンポを知っているマンコは、すぐにレイゴにフィットしようと柔軟に形を変え、記憶していく。

キツ過ぎることないねっとりとした膣圧は、チンポ全体にしつかりと快感を与えるのだ。

そんなタリアのセックスを間近で見ている牝奴隷達も、自分に感情移入しながらオナニーに励む。

自室でモニター越しに見ているシンとレイは、二人揃って一緒にオナニーしていた。



「凄いな。あんなに気持ちよさそうに……
くう、よがっているのに……」

「足のホールドは絶対にはずさないって……
んっ、しゅ、執念すら感じる……」

「中出ししてもらって、孕みたいって感じたよな」

「な、中出しされた後のオマンコ舐めたい……」





「シ、シンはルナマリアがいるだろうー！」

「う……ん……、グラディス艦長のクニニは……
担当のいない俺に……任せてくれ」

「わ、わかった。それがいいと思う……」

「あ……ああっ！」

「イッたのか……早すぎるぞ」

「くう……だ、だがシンがイッたのなら……
俺も……」

「あ、ああ……」



催眠支配され、寝取られマゾとして服従を誓っている二人はタリアに感情移入しつつも終わった後のことを考えながらオナニーしていた。

彼らに限らず、ミネルバの男性クルーにとって至福の時間はレイゴに抱かれた女のオマンコを舐め、偉大な主の精液が混じった愛液を舐めることなのだ。

クニニ以外の直接的な性行為を禁じられている男奴隷達は、自慰以外で射精することはない。

自慰以外で性欲を発散しようとも思わない。そう心を操られているからだ。

牝奴隷に手を出そうなどと間違っても思わない。

美しい牝奴隷達の体を貪り味わうことができるのは主であるレイゴただ一人なのだから。

そんな奴隷の男達が自慰で無様に射精するころ、タリアも絶頂を迎えようとしていた。



「あっ♥あっ♥」

「イクッ♥」

「御主人様のオチンポが気持ち良すぎてっ♥」

「イッチャいますっ♥」

「お、俺もイキそつだ……っ」



「いっしょにっ♡」

「いっしょにイキましょっ♡」

レイゴのチンポが射精しそうになるのを感じ、
タリアは自分も我慢することなく快感を受け入れ、
同時に絶頂を迎える。

「うっ……お……」

「ああっ♡」

「あああああ……♡♡♡♡」



ほんの一瞬早く絶頂したタリアのマンコは、
射精の快感を最大限に高める。

多くの美女たちを抱いてきたレイゴも、
これほどの快感は初めてだった。

一度射精しただけでは治まるはずもなく、
レイゴは抜かすにもう一回戦を始めるのだった。



数時間後

「んっ♡あんっ♡」

タリアを犯しまくった後、レイコはカガリを跨らせ
まったりとクールダウンのエッチをしていた。
ベッドのすぐ後ろでは、
アルナマリアとラクスも専属男奴隷にクンニをさせて、
アソコの準備をしている。



「あんなに射精したのにまだやれるなんてっ♡」

「くっ♡んっ♡」

「やっぱり御主人様はすごいな♡」

「まあな。ただ正直やり過ぎた」

「気持ち良すぎてチンポがどうにかなりそうだった。やりなれたマンコでクールダウンしとかないとな」

「わ、私のオマンコだってタリアくらいの年齢になるころには……！」

「暗に自分のマンコより気持ちいいと言われ、それが嫌だ。嫉妬してしまう。その人なカマンコに対しては、そん人なカマンコに特徴があつて、それ一人マンコに好きな部分があると言いなためだ。」

まったりセックスが行われている隣のベッドでは、
イキ疲れたタリアがぐったりとしていた。

「こんな呆けた顔、私もしてみたいですわ♡」

「それだけ御主人様が激しかったってことですよね……」

「私達も負けていられませんか」



「ヌーッ♡おちんちん♡」

「ごっ……キラッ……せんせー♡強めに舐めなななっ♡」

「ぐんぐん……んんん、んんん♡わがまま♡……」

「うん……んんん……」

「おっ♡」

「いっ……んんん……強ちゅおちんちん♡」





それから、ミネルバの環境は一変した。
全ての人間が支配された艦の中で、
レイゴは本性を隠すことなく王の様に振る舞う。
艦内にいる全ての奴隷達もレイゴの事を敬愛し、
女達は常に抱かれることを望んだ。

ある日、タリアは一日の予定を伝えるにレイゴの部屋にきていた。

艦長でもある彼女は情報を一括してまとめられるため、牝奴隷であるとともに秘書の様な立場も兼ねている。

「今日の予定ですが……」

まずはその前にオチンポ様に御挨拶させていただきます♡」

「おまえ最近チンポがしゃぶりたくて報告にきてるだろ」

「まさか♡」

「これは秘書を仰せつかった者の役得です♡」

それに目の前に御主人様がいらつしやるのに、御奉仕しないなんてそれこそ罪です」

「ものは言い様だな」



「じゅるるっ♥ぶちゅるるっ♥」

（ああ御主人様の朝一オチンポ最高♥）

「朝から抜け駆けしてフェラしているなんて他の奴が知ったら大騒ぎだな」

夢中になってチンポをしゃぶるタリアは自分のフェラ音でレイゴの言葉も聞
そんな激しいフェラチオは、朝立ちチンポを簡単に射精させてしまふ。

「お口に射精して頂きありがとうございます♡」

「発抜いた後は、タリアも普通に予定を報告する。

「本日は通常航海のみですので、いつでも御連絡下さい」
「牝奴隷達はみな準備が整っています。
もちろん、私も含めて♡」

「そうだな……」



レイゴが抱く女を指名すると、タリアは別室へと向かった。



ミネルバの倉庫を改修して作った大部屋に、
待機中の牝奴隷達はいる。

その部屋では、それぞれの牝奴隷に男があてがわれ、
常に体を高めていられるようにアソコを舐め続けている。

「グラデイス艦長、誰かに声がかかったのか？」

「ふん、御指名があったぞ」

「キラ！もっとちゃんとクリトリスを刺激なさい！
朝だからって怠けてはだめですわ」

「へろへろ……ふあい、わかりました……」

「じゅるー！じゅるるるっー！」

「あんっ♡それくらいですわっ♡
それでグラデイス艦長、誰が指名されたのですか？」

「私がいいな。昨日はメイリンが指名されたから私はお預けだったし」

『**真逆なほど、今日最初の御指名はラクス・クラインだ**』

えー！！

「ふふっ♡かしこまりました。すぐに着替えて向かいますわ♡」
指名されたラクスはすぐに服を着て、レイコの部屋に行く準備をした。

「あっ、そうですわ」

着替えを済ませたラクスは、せっかく脱いだパンツをネー、タリアに向かって尻を差し出した。



「ラクス・クライン。どうしました?」

「グラデイス艦長。」

「良かったら私のオマンコがしっかりとほぐれているか確かめていただけな
「オマンコを?」

「はい。キラのクンニがいまいちでしたので」

「そうですか。」

「わかりました、舌で舐めさせていただきます」

「宜しく願います♥」

ラクスのアソコに顔を近づめると、
タリアは状態を調べるように舌でアソコを舐めまわした。



「んっ♡あんっ♡」

「ちゆるるっ、れろれろっ。うん……？」

「確かに濡れ方がやや足りないのと、ほぐれ具合も微妙ですが……
これはこれで良いのではないでしょうか」

「いつもと違った感触を味わってもらおうのも、時には新鮮です」

「なるほど。」

艦長がそうおっしゃるならそれも良いかもしれませんが

タリアの後押しもあり、
ラクスは良い精神状態でレイゴの部屋へと向かった。



「ラクス・クラインが帰ってきたら次はルナマリア、あなたが呼ばれるわ」
「入念に準備してさへいよ」



「わかりました♥」

「聞こえたわねっ、シン、ちゃんとオマンコの中まで舌を入れてクニニしなさいよね」

「だっら.....おはひまひな.....」

「んっ♥うん、それでいいわ。クズでもやればできるじゃない」

「だるまはん!はらばら.....」



「はあ……♡はあ……♡」

少ししてルナマリアが呼ばれた。
シンのクンニをうまく調整し、イク直前の体を維持し続けたルナマリアは、
ふらふらしながら部屋を出ようとした。
その時、タリアが彼女を呼ぶ止める。



「スカートの丈の長さをチェックします」

「御主人様に欲情していただける最適なバランスになっているか
確認するのも私の役目よ」

「うう……か、体には触れないでください……
い、イツちやいそうなんで……」

「少しくらいは我慢して」



「さて……」

「〜ツツ♡」

「ソックスよし、絶対領域よし……
大丈夫そうね。合格よ」

「あ、ありがとうございます」

タリアの検査を済ませたルナマリアは、
ふらふらしながらレイゴの部屋へと向かった。

「御主人様！」

「あう♥つ、次はカガリさんです……」



しばらくして部屋に戻ってきたルナマリアは、レイゴと一緒にいた。次のカガリは「つちで男達に見せつける形です」と言う。

「御主人様とのエッチをみんなに見てもらえるなんて……♡」

「お前の乱れているところが良く見えるように、俺に跨れ」



「かしこまりました、御主人様♡」

セックスが始まると、他の奴隷達もイヤらしい音を聞きながらオナニーをしつつ、食い入るようにその姿を見ていた。

「ハハ、やっぱり騎乗位はお前が一番かもな」
「根元の締りが違う」



「んっ♡くふっ♡あんっ♡」
「あ、ありがたっ♡おちまっ♡」
「嬉しっ♡すっ♡」

褒められたカガリはさらさら「アソコ」を締めつけ、
激しく腰を振った。

予定していた牝奴隷を抱き終わると、
部屋に戻って休む前にタリアがお掃除フェラをする。

ハメた後のチンポをしゃぶりすぎて、

誰のマンコにハメたのかフェラしただけでタリアはわかるようになっていた
お掃除フェラと言いつつ、大抵は射精まで啜える。
一度精液を出して、最後に仕上げのお掃除フェラをするのがいつもの流れだ



「今日の予定はこれで終わりですね」

「部屋でお休みになられている間にお風呂の準備をしておきます」

「いや、まだ終わりじゃない」



「とっぴいますとっぴ」

「お前が残ってるだろ」

「ー」

「今日は時間があるから、お前も抱くぞ」

「御主人様……!」

「わかつたらさっさと脱げ」

「は、はいっ♡」

まさか自分も抱いてもらえるとは思っていなかったタリアは歓喜した。そしてすぐに服を脱ぎ捨て、身を委ねる。そんな彼女をレイゴは後背位で他の牝奴隷達に良く見えるように挿入した。



「う、これやびやいれすっ♡」

「お、おくまへっ♡はいっれ♡」

「ああっ♡す、すっびっ♡」

完全にレイゴのタイミングで抜き差しされて、子宮をノックされる度に絶頂
呂律が回らないほど強引に何度も何度もイカされるタリアに周囲も羨ましそ

彼女がイキそうになると、今度は体を持ち上げてそのまま犯す。イキ顔が隠しようのない態勢で、タリアもさらに快感が高まる。

「も、もうらめれすっ♡

イキすぎてっ♡あたまっ♡お、おかひくっ♡」

「壊れてもまた頭弄ってやるから、気にせず狂っちまえー！」

「あっ♡あああゝゝゝゝっ♡♡♡♡♡」



「はあ……♡はあ……♡」

セックスが終わると、
ベッドに倒れ込んだタリアはだらしなく股間から精液を溢れ出させ、
余韻に浸っていた。

「あーあ、まただらしないアへ顔さらしちやって
艦長が一番イクのに弱いですよね」

「あの態勢なら誰でもこうなってしまうわ」

「……さっずですけれど、こんなに漏らしちやってもつたいないですよ」



レイゴもさすがにやり疲れたのが、部屋の椅子に座って息を整えていた。

「ルナマリア、お前そいつを抱えて持ち上げる」

「かしこまりました」



「よっよっ……」

「えっー?」

「ぶっぶっ……」



「あ、いえ、なんでもありません」

「か、軽い……!」

「(私より肉付が良いのに私と大して変わらないじゃない!?)」

「んんっ……」

ルナマリアが軽々と持ち上げると、
タリアは体をぶるぶると震えさせた。

どうやら尿意があるようだ。

「我慢しないでっ……」

「そのままみんなにだらしなく漏らすと……」

「そ、それは……」

「命令してもいいんだぞ」

「わ、わかりました……んんっ♡」



「あ……ああ……♡」

ジヨロジヨロとおしっこを部屋にまき散らすタリアの表情は、
恥ずかしさよりも快感が勝っていた。

放尿が終わると、ルナマリアは奥にいる男を呼ぶ。

「んーっちだきて」のオマンコを綺麗にしてあげなさい

「はい。わかりました」





「失礼します……!」

「んんっ!」

「ぺろぺろっ、っ、ごめんなさー!」

「くっ♥」

「どうです。私の専属でだいぶ教え込みましたから、舐め方上手でしょ♡」

「ぢゅるっ！べろれろっ、じゅるるっ！」

「ひやあんっ♡す、凄いわっ♡」



シンにアソコを綺麗にさせると、
タリアは呆けた顔をしながら立ち上がった。

そして他の牝奴隷達と共に並ぶと、一日の終わりの挨拶をする。



「今日も私達を奴隷に御奉仕させていただき、
ありがとうございます♡」

「あしたも全身全霊を込めて御奉仕するので……」

「どうか私達を可愛がってください♡」

「御主人様に御満足いただけるよう、
全力を尽くします♡」

「ああ。明日も宜しくな」



「はい！御主人様♡♡♡」